

『北京と内モンゴル、そして日本』

——文化大革命を生き抜いた回族少女の青春記

作家・中国語教師 金佩華



金佩華と申します。来日してからすでに25年になりました。今年3月に出版した本をきっかけに、本の編集を担当してくださった朝浩之様を通して、矢吹晋先生に声をかけていただき、今日ここで本の話させていただくことになりました。心から感謝いたしております。今日は主に私がこの本に込めた思いを話したいと思っております。

1. 東日本大震災のさなかで

2011年3月11日午後、私はパソコンに向かい、本の原稿を打っていました。突然強い揺れに襲われ、反射的に打っている文章を「保存」し、パソコンを消してから机の下に潜りました。余震と停電

した暗闇の中で恐怖に震えながら、文章を「保存」してパソコンを消したのは良かった！と思っていました。

私は自分に問いました。「もし死ぬなら、もっともやっておきたいことは何なのか」と。答えは「この本だ！」

「この本を世に出さないと死ねない」と、自分の反射的な行動の深層に隠れていた本に対する気持ちが、力強く心の底から湧きあがりました。

どうしてこの本を仕上げる気持ちがあるほどまでに強いのか？

実は20代後半から、私は「なぜ自分はこんなに苦しまなければならないのか」と強

く世に訴えたいと思っていました。それに近年は文化大革命（文革）のことが風化し、当時の状況を知らない人が増え、さらには改革开放前の時代を懐かしみ、当時の指導者を神様扱いする風潮さえあ



ります。

私にはもともと「文革を風化させてはならない！今の社会にどんな問題があっても、あの時代に絶対逆戻りしてはいけない！あの時代を経験した人間として、世に伝える義務がある！」その時代を生き抜いた者として書こう！という気持ちがありました。あの地震以降、自分のためではなく、同じ時代を生きた人々のために書こうと思うようになりました。

1976年に中国で唐山地震という大地震が起こりました。25万人が犠牲になり、北京も大きな影響を受けました。私が住んでいた家の壁が崩れ、余震と大雨の中、電線がぶつかって火花が散り、住民は誰もレンガ造りの部屋に入れず、まるでサルのように一団となって傘とビニールシートの下で震えていました。

やっと余震が収まり、「大事な物を持ち出さなければ」と、みんな大慌てで部屋に入り、急いで部屋を出ました。その時、私は日本語の辞書を洗面器に入れて、上からもう一つの洗面器をかぶせ、辞書が濡れないように大事に持ち出しました。

当時は無我夢中でしたが、今思うと何を失っても砂漠で始めた日本語の独学を中断したくありませんでした。まさか30数年後、東日本大震災の強い揺れの中で、

日本語で本を書いているとは想像もできませんでしたが。

私は若い時から漠然と、日記帳を前の方からは日記、後ろの方からはメモにし、思いついたことがあったらすぐ一言書いておくようにしていました。

その後、本を書こうと思うようになり、2000年には、世界、中国、周辺、自分のでき事の一覧表を作り、本の構成、目次もでき上がりました。ほぼ2000年から授業以外の仕事を全部断り、書く作業を始め、第一稿は何と50万字近くになってしまいました。その後は書き直しの連続で、何回書き直したかは数え切れません。出版を実現するためにとにかく頑張ろうの一心で、原稿用紙は山になり、今年の3月、ついに出版できました。

1976年の唐山大地震の際の行動が2011年の東日本大震災のときの思いにつながり、砂漠の中で独学によって始めた日本語が実を結ぶことになりました。

2. 恵まれない者の代弁者として

中国は1949年の建国後、さまざまな政策、施策を実施してきました。私はその全部を否定するつもりはありません。誰もその全部を否定することはできない

と思います。

私が問題だと思うのは、「階級闘争」の名のもとに、国民を味方と敵に分け、敵とされた国民が差別されたり、人生を狂わせられたりしたことです。

建国後早い時期に各家庭をランク付けし、そのランクを「出身家庭」として子どもや孫の代も引き継ぐようにしました。そして「革命幹部」や「貧しい農民」などは「出身家庭がいい」とされ、「地主」や「資本家」などは「出身家庭が悪い」とされ、出身が悪い家庭の2代目、3代目は大学に入れないかったり、重要な仕事につけなかったり、昇進できなかったりして、ずっと政治差別を受けることになりました。

また、頻繁に政治運動が展開され、その都度「敵」を作り、敵とされた人間はひどい目に遭わされ、早死にした人も少なくないのです。

その延長線上にあった文革は、国民を味方と敵に分ける政治状況が極まり、全国民を巻き込んで頂点に達したものだと思えます。

私の家族も文革前から影響を受けました。私の出身家庭は「貧民」ですが、後に父親が「歴史反革命」のレッテルを貼られていたと知りました。母親も「悪い

人間」とされて、一時期、労働矯正所に入れられました。そのような親を持つ人間として、姉の1人は学業成績は優秀なのに、大学に入らず、就職のときも影響を受けました。

私の小学校の先生は北京で一流の高校を卒業していましたが、出身家庭のせいで大学に入らず、私たちの先生になりました。

私の大学の指導教授は1950年代の「反右派闘争」という政治運動で、「右派」とされ、中国西南地方の辺境で20数年間重労働をさせられました。1980年代に名誉回復され、私の母校の教員になりましたが、同期の人は皆立派な外交官になっていました。

そのような例は他にもたくさんあります。

私も影響を受けましたが、小学校時代にはいい先生に恵まれ、教育レベルの高い中学校に入り、中国の改革開放後の政治差別の撤回に間に合い、8年遅れましたが大学に入学できました。

私のすぐ上の姉は、辺境の地の中学校卒で、北京の高校に入らず、15、16歳から北京の郊外で植林の重労働をし、その後、やっと北京の工場に転職できたときは、体を壊し、改革の波に乗れるほどの

体力、知力と実力がなく、ずっとぼろ屋住まいで、去年（2013年）病気で亡くなりました。68歳でした。一言で言えば、まったく恵まれない生涯でした。私の姉のような人はたくさんいます。

「まったく恵まれなかった人々、早死にしてしまった人々のために、書こう」

「彼らの命の尊さ、理不尽な運命を強いられた悔しさ、生きるための強さ、強靱な生き方などを、自分の経験を通じて世に訴え、歴史に記録を残そう」

「どの国でもいつの時代にも読んでももらえる、共感してもらえようなものにしよう」

「一歩でもその目標に近づこう」それらがこの本を書く強い思いでした。

3. 砂漠をオアシスに変えた誇り

1966年夏、私が中学校2年生になる直前に文革は混乱期に突入し、勉強は中断しました。紅衛兵だ、革命だ、造反だとの時期を経て、1968年から「上山下郷」（山に登り農村に入る）キャン



ウランブハ砂漠の一角。中央が筆者

ペーンが始まり、1700万人ぐらいの中学生と高校生が都市から農村に送り出されました。

私は内モンゴル生産建設兵団という組織に入り、ウランブハ砂漠の一角に着き、砂漠を畑にする開拓と軍事訓練の日々を送るようになりました。

そこには木は1本しかありませんでした。夏の昼間は外を歩けないほど暑く、

冬は室内のタオルやこぼれた水が凍るほど寒かったです。1年365日、風が吹き、大変乾燥していました。着いた当初は住宅もなく、柳の枝で編んだものを組み合わせた小屋で過ごしました。仕事は自分たちの住宅造りから始まり、泥レンガ造りの住宅、井戸、道路、電線の敷設、用水路、畑、植樹帯など、人間の生存に必要なものを全部自分たちの手で造り上げました。

最初の仕事は2000年前の漢代の古墳を掘ることでした。古墳からレンガを取り出し、それを住宅の基礎にし、祖先の遺骨を太陽の下に曝し、貴重な文化財を破壊しながらの踏ん張りでした。

重労働の中、食事は大変お粗末でした。中国全体が物不足で、砂漠の中はいっそう食べ物がありませんでした。ホシイモ入りのトウモロコシのおかゆに漬物、饅頭（蒸しパンのような主食）は毎日食べられるわけではないし、お米はほとんどありませんでした。特に風が吹いた後は道路が砂で塞がり、食べ物か底をつき、お腹をすかせて寝るのはとても辛いものでした。

そのような状況のもとで、10代の少年少女が必死に頑張り、6年近くもの歳月をかけて、砂漠の一角をオアシスに変え

ました。私は1975年1月に砂漠を離れましたが、その頃は畑が広がり、用水路は網の目のように広がり、木の下で涼を取ることもできるようになりました。小麦、トウモロコシ、アワなどの穀物と野菜が収穫できるようになり、瓜が実る夏は楽しい季節になりました。

1999年、第二の故郷と思っています



内モンゴルでの最初の住まい

オアシスに里帰りしたとき、そこはまるで北京郊外のような風景になり、子どもたちは「知識青年が来た」という遊びをしていました。

私たち知識青年の砂漠での経験は、もしろいろな選択肢の中から自分が好んで行って苦労をしたのなら、何の問題もないと思います。今も砂漠を変えようと頑張っている方がいます。

問題は当時の若者は教育を受ける権利を奪われ、自分の人生の道を選択する余地を与えられなかったことです。神聖そうなスローガンでマインドコントロールされ、人生を一本道に縛られたことです。しかも都市から農村へ送り出された後は、必要な援助とサポートが全く足りず、より多くの辛酸、困難、試練に直面させられたことです。

そういう訳で、私のような世代の経験は時代と社会の角度から見れば、一世代全体の悲劇、時代の悲劇、社会と歴史の後退だと、私は思います。

しかし個人の角度から考えれば、それは誇りでもあります。想像を絶する困難な状況を乗り越えたこと、政治的な狂信のもととはいえ、一つの信念、夢に熱く燃えたこと、砂漠の一角をオアシスに変え、結果を出したこと、そのすべてが自

分の誇りとなっています。

1700万人の「知識青年」の具体的な経験はそれぞれ違いますが、皆、似たような誇りを持っています。私と同世代の人たちは不幸不運な青春時代を送りましたが、その中でも夢を見つけ、命の花を咲かせ、強い生命力の持ち主になりました。形は違いますが、それぞれ赴いた地で自分なりの結果も出しました。私はこの世代のことをどうしても世に伝えたいのです。

4. 人生のどん底から這い上がる生き方

砂漠へ行った当初、私は複雑すぎる現実から抜け出し、大自然とだけ向き合えばいいと期待していました。しかしその期待は完全に裏切られ、砂漠は青春、成長の修羅場になってしまいました。

農業生産では「活着干、死了算」（全力を尽くそう、死んでもいい）と叫ばされ、必死に頑張った結果、オアシスが現れましたが、体を壊す人も続出しました。今思うと未来のある10代の少年少女を死んでもいいという気持ちにさせるなんて、憤りを感じますが、当時は本当にそのような気持ちになり、実際に死んだ人もい

ました。

軍事訓練では、「国境地帯に根を下ろし、国を守ろう」というスローガンのもとで、朝の訓練、夜中の緊急集合、実弾演習などをこなし、この地で国を守り、一生をささげようと思いました。ところが逃げた人が解放軍に入ったり、推薦されて大学に入る人が現れたり、どこかの工場などで再就職したりした人も絶えませんでした。

政治学習では、「頭の中の修正主義や私利私欲と闘い、魂に触れる革命を起こそう」と、頭の中まで管理され、どんな理不尽なことがあっても、自分に原因があり、頭の中に敵がいるから、革命意志が弱いからと、批判と自己批判が繰り返られ、どう頑張っても評価されない、救われない状況でした。

3年近く狂信して頑張ったのですが、心身ともについていけなくなり、政治教育と現実とのギャップを強く感じ、疑問がどんどん増えていきました。答えを見つめるために読書に没頭し、やがて「自分の人生をこの砂漠に葬られてたまるか」と思い、自力で運命を変えようと思うようになりました。

運命を変える手段として、選んだのは日本語でした。1972年、当時の周恩

来総理は「かつての戦争は一握りの軍国主義者が起こしたことで、日本国民も莫大な被害を受けた。」と国民を説得し、中日国交正常化を実現させました。私はそのことから、将来日本語がきつと役に立つと察知しました。そのため、20歳の私は砂漠で重労働をしながら、日本語の独学を始めました。

夜、インクの瓶に綿で作った芯を刺して灯火を作り、その光の下でどんなに疲れていても日本語の勉強を続けました。1975年に北京に戻ってから、小さい工場に就職しても、唐山大地震の中でも、独学を続けました。

1978年に全国大学統一試験が復活し、政治差別が撤回されたのを機に、受験して大学の日本語科に入りました。大学ではいい先生に巡り合い、卒業後、大学の教員になりました。その後は日本へ留学し、今に至っています。

私のどん底から這い上がった経験も1つの実例にすぎません。同じ世代の縮図にすぎず、苦しみの中で当時の若者は、皆、狂信から、疑問を持ち、大いに悩み、人生の道を模索していました。皆、苦しみの中の誇りも持っています。

経験者としてこの本で、泥沼に落ちても必死になれば脱出できることを伝え、

困難な状況にいる人には勇気を与え、恵まれている人には自分の幸せに気付くきっかけにでももらいたいと思います。

5. 庶民の助け合いへの恩返し

今までいろいろな場面で、いつも誰かが手を差し伸べてくれ、皆に助けられて生き延びてきました。本にも書いてありますが、実は書いていないことの方が多いのです。

例えば、文革中、家出同然に無賃乗車で地方に行く途中、天津駅に入ったとき、改札のおばさんに「こちら！ お前たち、何をしているの！」とすごい剣幕で叱られました。追いかけてはきませんでしたが、慌てて乗った車両は車庫に入ってしまった。車両の中で夜を過ごすのは寒くて、関係者以外入ってはいけないボイラー室に勝手に入りましたが、ボイラー室のおじさんは怒るところか、そこで暖を取るのを許してくれたばかりか、北京行きの車両もさりげなく教えてくれて、やっと北京に帰ることができました。

砂漠に行って初めてのメーデーの日、私は大泣きしてしまいました。炊事班が私のために作った羊肉の煮込みを食べられなかったとき、炊事班長はずっとそば

に座り、慰め、説得し、私がきれいに食べ終わるまでいてくれました。

そのような生活上のことだけではなく、精神的にも多くの人に助けられて今のようない人間になったのです。

文革中、学生が労働者宣伝隊の指導のもとで、問題があるとされた教員の審査を担当することがありました。4、5人でグループを作りますが、リーダーは労働者です。私が入ったグループの審査対象になった先生は、自分に非があるとは一向に認めません。そうすると「革命の成果」が出せませんので、他のグループのまねをして、先生を寝させない「24時間攻撃」をしようかという話が出ました。文革は人の魂に触れる革命で、そのためなら何をしても許される時代でした。

ところが労働者のリーダーは「そのようなことをしてはいけない。ひどい目に合わせて得たものは真実ではない。第一、人を痛めつけること自体、してはいけないことだ」と私たちをさとしました。当時の時代精神に反する勇気のある発言でした。そのとき、私は強く心をうたれ、本来敵対するはずの先生とリーダーの2人ともが、私の人生の鏡になりました。北京に戻り、やっと入った工場には唐広擁という「おかしい立場」に置かれて

いる人がいました。最も汚い仕事をさせられ、皆、口ぐちにその人は悪い人間だと言っていました。しかし政治イベントがあるたびに、この人は書道の才能を発揮し、皆に重宝されました。

本人は、けなされようが、褒められようが、いつもにこにこして目の前の仕事をこなしていました。その人柄と書道の素晴らしさに惹かれて、彼は私の書道と太極拳の師匠になりました。私が日本に来るときには左手書きの書で素晴らしい言葉をくれました。

以上のような話は語り始めれば、きりがありません。貧困と自由の足りない状況の中で生き抜くには、お互いの助け合いが不可欠でした。自分という命が、今日のように心身ともに元気でいられるのは庶民の助け合いの結晶とも言えます。助けてくれた人々に感謝を表すためにも、この本を書かなければならなかったのです。

苛酷な政治状況とは対照的な、庶民の心の温かさ、助け合いの尊さ、大切さも、自分の例を通じて記録し、世に広めたかったです。

要するに、本の形で、助けてくれた人に、見知らぬ人も含めて「ありがとう」

と言いたかったのです。実は今でもその全部を本に入れられなかったことが心残りになっています。

6. 回族出身者としての心情

回族とは中国の55の少数民族のうちの1つです。寧夏回族自治区や小規模な自治地域など、回族が集中している地域がある他に、漢族の中で暮らす人も数多くいます。

ルーツは7世紀ごろ以降、アラビア半島、イラン高原、パミール高原などから、中国に入った商人や宗教者に求められます。彼らが中国に定住し、中国人との混血によってできた民族です。13世紀にモンゴルのフビライが宋と戦った際、中東地域のイスラム教徒を参戦させたことにより、回族は中国全土に暮らすようになり、今は最南端の海南島にも住んでいます。

回族が集中している地域では、イスラム信仰が強いですが、漢族の中で暮らす回族は宗教信仰が薄れ、食習慣だけ守っている人が多いのです。さらに漢族と結婚した人の2代目は戸籍上は回族ですが、食習慣も漢族とほぼ同じです。

そういう訳で、同じ回族でも違いがあ

り、回族＝イスラム教徒ではありません。私は生まれてから家族とともに北京市内で漢族の中で暮らし、家庭では礼拝も断食もせず、豚肉を食べないなどの食習慣だけを守っていました。姉たちは漢族の男性と結婚したので、姪や甥たちはほとんど戸籍上だけの回族になっています。私自身はイスラム教の知識が乏しく、母から得た知識も食習慣に関するものだけです。

文革前は日常的に民族がらみの口にするいじめがありました。しかし、文革中とはありませんでした。しかし、文革中は、宗教は迷信とされ、回族の食習慣は古い風習とされ、回族集中居住地域ではいろいろなことがあったそうです。私が経験したのは無理やり豚肉を食べさせられることでした。精神的にまいってしまい、胃の病気になる、今も胃が弱いのです。今の自分は鍛えられたというか、豚肉に対する心理的な抵抗が薄れ、豚肉そのものは食べられませんが、ハムやソーセージなら食べられるようになりました。自分では半分、民族の裏切り者だと思っています。

一方、私のような「裏切り者」でも、漢族の人とは心情が違います。

例えば、ある漢族の人が「日本のスー

パーには新鮮なものがない」と言いました。その話にびっくりし、理由を尋ねると、「ほら、全部死んでいるじゃない。生きたままのものがいないよ」と答えました。例えば漢族の人はよく生きている鶏などを買って自分でさばいて調理します。回族の人はそれができません。川魚を買うときでさえ、みんな生きのいいのを買いますが、私は死んでいるのを選びます。よく笑われました。

海外旅行でトルコへ行き、宗教信仰のない私ですが、今は亡き親のためにモスクで西に向かって礼拝をしました。そのような心情は漢族の人にはありません。しかもそれは「裏切り者」になった私の心情です。厳格な回族の心情感覚を考えれば、漢族と随分違うのは明らかではありません。

文革中は相手を批判するとき、さまざまな無実の罪や口実が持ち出されましたが、回族の信仰や食習慣もその中の1つでした。文革前後は豚肉を食べることを強要されるようなことはなく、むしろ、例えば断食明けに特別配給があるなど政策上の配慮があったのは事実です。

問題は実際の生活の中で、人々の無意識の差別、無関心、無神経が回族を傷つけることになるということです。だから

こそ回族の心情、皆が何でもないと感じるときは回族の受け止め方を知ってほしい、同じ中国人でも民族によって違うところがあることを理解してほしいと思い、回族出身ということも素直に出して、ありのままの心情を書きました。

7. 日本語で書く

この本を日本語で書くことにしたのは大きな理由があります。

自分は砂漠で日本語の独学を始め、その後、人々に支えられ大学に入り、いい先生にも巡り合えました。日本に来てからは、多くの日本人の世話になり、日本人と結婚もして幸せになりました。「苦勞して身に付けた日本語は何のためであったか、自分が幸せになるためだけだったのか？ いや、もっと意味があるはずだ。何か一つ形のあるものに仕上げて、皆のためのものにしなければならぬ」との思いが日に日に強くなっていました。この日本語の本はまさに自分に対する不満を解消し、砂漠から始めた日本語の学習の究極の意味を実現させた私の宝物です。ありのままの思いを書きたかったのですが、中国で過去に対する批判はどこまで許されるのか、出版できるのか、自信

はありませんでした。しかし、日本人の読者に生の中国、普通の中国人の思いを知ってもらいたい、理解を深めてもらいたい、いろいろな面で助けてくれた日本人の人たちにもこの本で感謝を表し、恩返ししたい、という気持ちが込められています。

中国の文革の事実が風化しつつある今日、一昔前の中国を知ってもらい、今の中国は今までの歴史、特に現代史の延長線にあることを理解してもらい、少しでも互いの理解と友好交流の役に立てれば、恩返しもできるのではないかと、今もそう思っています。

結局、あとがきに書いてあるように、この本を完成する過程で、また多くの人から何らかの形で助けられました。書いたのは私ですが、多くの方の手助けがなければ出版できなかったと思います。

この本は草の根の交流の結晶で、日本と中国の人々の友好の証でもあります。

結び

出版できた今は、長い年月を費やし、途中で何回も挫折しそうになったこともあります。中国と日本人々に支えられ、結果を出せたのは本当によかったと思います。

ます。出版をきっかけに今日のように中国のことを話す機会も得られ、新しいつながり、絆が広がると信じております。緊張する政治関係とは別に、中国と日本の生の人間、普通の人々の間の交流、理解、感情、信頼に大きな意味があり、大きな力になると思います。

これからも日本に暮らす中国人として、皆さまとともに草の根の交流、友好に力を捧げる所存です。

ご清聴、ありがとうございました。

(2014年8月1日・フォーラム)

講師略歴 (きんはいか・JIN peihua)

中国北京市生まれ

1969年〜75年 内モンゴルの砂漠へ下放

1979年 北京第二外国语学院分院 日本語科へ入学

1983年 卒業 同学院講師

1987年 立教大学研究員として来日

1990年 北京連合大学旅遊学院副教授

1991年 再度来日 中国語講師

著書 『桜と牡丹』『中国の一郷に入りて郷に従わず』『観光サービス導論』など